

A red circular logo with a black spiral in the center. To the left of the spiral is a black musical note. Below the spiral is a black stylized flower. To the right of the spiral is a black water drop.



2026/02/17(TUE)-03/01(SUN)
12:00-20:00 最終日のみ 17:00 まで
MEDIA SHOP | gallery2
京都市中京区河原町三条下る一筋目東入る
大黒町 44 VOX ビル 2F

ステートメント

本展は、社会の中で大人とされる30歳前後の男性4名によって構成される。男性自身が、男性性のもつ社会的特権性や支配的な立場を自覚しつつ、そこにとらわれない男性像をいかに構想できるかを主題とした展覧会である。

近年、マイノリティの権利獲得やジェンダー平等への意識が広がる中で、これまで社会のマジョリティであった男性の役割や特権性そのものが問い直されている。こうした議論の蓄積はジェンダー理解に不可欠であり、本展もその流れの上に位置づけられる。

しかし一方で、男性を他のジェンダーとの比較の中だけで語る枠組みは、男性自身が男性性を考えるための視点をかえって見えにくくしてしまうことがある。他者との関係性を軽視するということではなく、男性を相対化する方法だけに依拠すると、当事者性が抜け落ちたり、無用な分断を生む可能性があるためだ。かつては「男性全員に共通する形質」として語られていた男性性も、時代や環境に応じて多様であり、複数形で考えられるべきものだという議論が広がっている。

本展は、男性を他のジェンダーの立場から批判的に捉えることだけを目的としない。むしろ、男性が「男性」というジェンダーをいかに個別的・創造的に形づくっていきけるのかに焦点を置く。そのための手がかりとして「少年」というモチーフを扱い、歴史的に形成されてきた男性規範がインストールされる以前の過渡期的な状態を想像することで、既存の男性性を解体し再構築するための視点を得ようとする。

まず本展では、各作家が自身の制作の中でどのように男性性を表し、どのように差異化しているのか、その「現れ方の違い」を確認したい。そのうえで、それらを「少年性」という観点から改めて捉え直すことを試みる。

ここで言う「少年性」は、生物学的な成長段階を指すのではなく、あくまで思考の装置として位置づけられる。実在の少年たちの経験を一般化する意図ではない点を強調しておきたい。少年期とは、家族に守られた環境から外の世界へと徐々に接続し、同時に身体的な変化を経験し、自らの身体が他者のまなざしに晒されていることを意識し始める時期である。こうした経験を通して少年は社会と接続し、そこで初めて男性規範に触れ、その一部を無意識的に取り込みながら「男性」へと移行していく。しかしこの移行は自己を確定させるものではなく、後になって参照し直すこともできる揺らぎを含んでいる。その意味で、作品の中に「少年」的な無邪気さや情動、あるいはグルーヴが感じられるとしても、それは単純に作家が“少年の側面を維持し続けている”ということを示すものではない。むしろ、成人男性が社会的に形作られた男性性の規範を自覚しながら、その外側に位置する態度を想像し、“少年を演じる”ための身振りとして理解できる。こうした少年性の“演じられ方”には、既存の男性像を揺るがし、個別に作り直すためのヒントが潜んでいる。大人の男性が、自身の中にある社会的特権性を認識しつつ、それがまだ確定的ではなかった時期――

いわば未成熟で、複数の可能性が開いていた時間――をあえて再想像し、それに基づく態度を取ろうとすることは、ときに滑稽に見えるかもしれない。ただし、この滑稽さは軽蔑や揶揄ではなく、確立した振舞いを一度脱ぎ、別の態度を試みようとする試行錯誤の現れとして重要である。男性性そのものが固定的ではなく、状況に応じて見直しや更新が可能なものであることを示す行為として理解できる。また、無邪気さや自由な想像力、ユーモアは作品制作において確かに重要な要素になり得る。しかし、作家がその要素だけで制作を続けられるわけではない。経験や技術、他者との交わり、社会の中で大人として生きることから生じる複雑な動機づけなど、複数のエンジンが重なり合うことで作品は成立する。ゆえに、30歳前後の大人の男性である作家が、あたかも「少年」的な制作をしているように見える場合、その態度は実際には維持ではなく、想像的に組み立てられた演じ方として読むことができる。

この“演じられた少年性”を通して、各作家がどのように既存の男性性の枠組みを揺さぶり、別様の男性像を開くための実践を行っているのか――

本展は、その視点を提示しようとするものである。



企画 | 堀 奏太郎



展覧会詳細